

## 気仙沼の仮設に「交流のデッキ」 京都工芸繊維大生ら作製



京都工芸繊維大の学生らが作った木製デッキでくつろぐ住民たち(6月1日、宮城県気仙沼市本吉町)＝阪田准教授提供

京都工芸繊維大の学生らが、宮城県気仙沼市の仮設住宅近くにウッドデッキを作った。現地の林業振興にもつなげようと、間伐材や津波被害で枯れた木も活用した。学生たちは「今も仮設住宅に暮らす人たちが交流を育む場になってほしい」と願いを込める。

工織大の阪田弘一准教授と多田羅景太助教の研究室の学生、明石工業高等専門学校生徒たち。2年前から気仙沼市本吉町の復興支援に携わっている。

昨年、宮城北部森林・林業活性化センター気仙沼支部から「地元の間伐材を生かして何か作れないか」と阪田准教授らに

相談があった。仮設住宅からの転居が増える一方で、震災前にあった地域コミュニティーのつながりを失ったまま仮設住宅に残された高齢者の孤立化が懸念されており、交流の場としてデッキを作ることを決めた。

場所は、町内最大規模の約100戸の仮設住宅がある中学校敷地内。廃業した現地の製材所で間伐材を製材、津波による塩害で立ち枯れしたスギも用いた。デッキは面積約60平方メートルで、机と椅子も設けた。

今月行われた完成式で、さっそく住民らが腰を下ろし、「良いものを作ってくれてありがとう」と学生たちに笑顔を見せた。リーダーの大学院修士2年上野信幸さん(25)は「デッキが人と人がつながる場になればうれしい」と話している。

【2013年06月14日 15時50分】

Copyright (c) 1996-2013 The Kyoto Shimbun Co.,Ltd. All rights reserved.

各ページの記事・写真は転用を禁じます。著作権は京都新聞社ならびに一部共同通信社に帰属します

[ネットワーク上の著作権について](#) [新聞・通信社が発信する情報をご利用の皆様へ](#)(日本新聞協会)  
[電子メディアおよび関連事業における個人情報の取り扱いについて](#)